

2022年7月17日 礼拝説教要旨

詩編講解説教115 「主に依り頼む幸い」

詩編115：1～11、マタイ6：24

詩編第115編では偶像礼拝の空しさが語られ、その上でまことの神さまに依り頼むことの幸いが語られております。2節に「なぜ国々は言うのか、『彼らの神はどこにいる』と」とありますが、これはおそらく捕囚によって異教の国々に連れて行かれたイスラエルの人々がそこで経験したであろう誹謗中傷がその背景にあります。侵略され捕らえられた人々が「お前たちの神はどこにいる」「何もしてくれないじゃないか」と嘲りを受けている様子が伝わってきます。

古代バビロニアには様々な神話があり、バビロニア人はその神々の像を拝んでいたと思われませんが、それに対して「わたしたちの神は天にいまし、御旨のままにすべてを行われる」（3節）とあります。これはそのような偶像を拝む人々に対する反論と捉えてよいでしょう。ユダヤ人は十戒の第二戒「あなたはいかなる像も造ってはならない」を厳格に守りました。神さまは見える偶像ではなく見えないお方です。しかし見えないからこそ、そこに真理がある、確かさがあると詩人は訴えています。

人間は見えるものに依り頼む傾向があります。実際に手で触れることができるもの、それはある意味確かなものだと言えるかもしれません。けれどもそうでしょうか。それは時に紛失してしまうかもしれませんし、壊れてしまうこともあります。年月が経てば忘れ去られ、朽ちてしまうものかもしれません。そこに見えるものの限界があります。それは非常に限定的なものなのです。ですからパウロも「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです」（Ⅱコリント4：18）と述べています。またヘブライ人への手紙には「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」（11：1）とあります。いかに見えないことに価値を見出すか。改めて信仰とは、この唯物的な世界に生きているわたしたちに対する挑戦であることがわかります。

4節以下は、さらに偶像礼拝に対する反論が続きます。「金銀にすぎず」（4節）というのは金や銀のメッキを施している像のことです。メッキが施され、どんなに豪華に見えようとも、それは人間が作ったものにすぎません。それは次に続く言葉のように「口があっても話せず、目があっても見えない。耳があっても聞こえず、鼻があってもかぐことができない」（5～6節）のです。もちろんただの像ですから自分の意思で動き出すわけでもなく、ただの置物でしかない。そういう偶像を拝むことの空しさが強調されています。

ここで特に注目していただきたいのは「偶像を造り、それに依り頼む者は、皆、偶像と同じようになる」（8節）という部分です。これは偶像礼拝の本質を突いていると理解できるでしょう。偶像に依り頼む者は結局、偶像のようになる。自分の意思で考え行動する生きた人間ではなく、ただのモノになってしまう。これは非常に意味深いことです。4節の「金銀」はメッキだと申しました。どんなに豪華に、荘厳に見えても、張り子のように中身は空っぽなのです。偶像に依り頼む者はそのようにうわべだけを着飾るような生き方になってしまうでしょう。あるいは外見を取り繕うような生き方になってしまうのです。外ではいつも善人を演じていても中身はそうでもないのです。そのギャップに疲れるのです。そういうことはないでしょうか。

また生きているのに生きていない、ただのモノのようになってしまう。「生ける屍」という言葉もあります。例えば自分の意思で考え行動するのではなく、周りの考え方に流されていく。そういう思考停止状態になる。「群集心理」という言葉があります。多数派の意見に追従し、付和雷同していく。かつて戦争に突入していった時代はまさにそうだったのでしょう。「一億総玉碎」といって国全体がそういう雰囲気になったのです。もちろんそれに抵抗する人々もいたでしょう。でも偶像にあふれ、これに依り頼む国の国民は煽動されやすいということを自覚する必要があります。

だからこそこのような偶像にならないために「主に依り頼め」と教えています。「イスラエルよ、主に依り頼め。主は助け、主は盾」（9節）偶像、見えるモノではなく、主である見えない生ける神さまに立ち返ること。そこにわたしたちが偶像から救われ、モノではなく人間として生きる道があるのです。では具体的に主に依り頼むということが何を意味しているのでしょうか。神さまはモノではありませんから目で見ることはいけません。でも確かに生きて働いておられる。それをどこで実感するのでしょうか。

それがこの礼拝です。礼拝の中で語られる神さまの言葉です。わたしたちプロテスタント教会では神さまの言葉を礼拝の中心にしました。そこではかつてのユダヤ人たちが偶像礼拝の国々の中で戦った同じ戦いをしたのです。ご存知のように、プロテスタント教会の礼拝堂には何もありません。絵画や彫刻などの像はない。それは宗教改革の戦いの中で勝ち取った一つの功績です。ローマカトリックに比べるとプロテスタントは殺風景で寂しいと思われる人もいます。手を合わせるものがないことに物足りなさを感じる人も多い。でも改革者たちは、そこは譲れなかったのです。なぜならわたしたちは物言わぬ像ではなく、生ける神さまの言葉によって生きているからです。

『ハイデルベルク信仰問答』では次のように告白します。「この方はご自分の信徒を、物言わぬ偶像によってではなく、御言葉の生きた説教によって教えようとなさるのです」（問98）神さまは御言葉によってわたしたちに今も生きて語りかけておられます。見えるものに依り頼み、そこに価値を見出すのではない。そういうものは過ぎ去り、朽ちていくでしょう。わたしたちは生きた主の御言葉に依り頼みます。「草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は永遠に変わることがない」（1ペトロ1：24～25）そういう永遠に変わることのない生ける神さまの御言葉に依り頼むからこそ、わたしたちもまた生きることができるのです。

そしてその生ける神さまの御言葉こそイエス・キリストご自身です。「言は肉となってわたしたちの間に宿られた」（ヨハネ1：14）この生ける神さまの言葉であるイエス・キリストをこの礼拝において、説教と聖餐を通してわたしたちは分かち合います。主は言われました。「わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる」（ヨハネ14：19）と。わたしたちはキリストの十字架とよみがえりの御業によって、偶像の支配、罪の支配から自由にされました。この救いにあずかり、わたしたちは神さまに造られた自由な人間として新しく歩み出します。